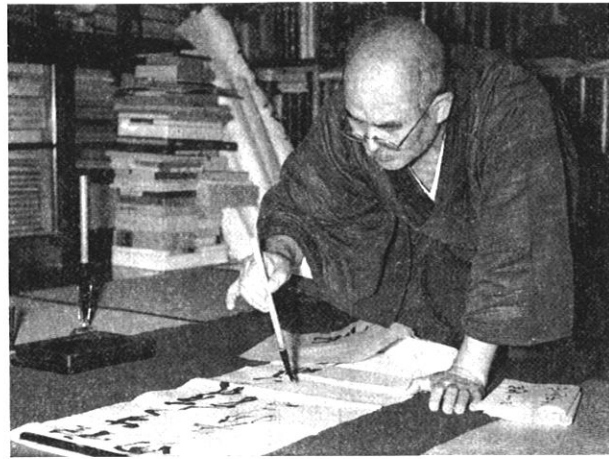


『席上揮毫』(一)



書齋で揮毫される中村素堂先生

書道の展覧会というものに初めて出品したのは、大正の中ごろに明治書道会という西川派（西川春洞）一門の展覧会に出したのが皮切りだと思ふ。

これは増上寺の黒本尊のあった旧庫裡を会場として、錦洞（林錦洞）氏の岳父（林洞）師の大いに斡旋するところだったと思ふ。そしてその祖洞師もまだ二十代だったと思ふと、歳月の忽々に感慨を催さざるを得ない。

それから日本書道作振会ができる。これが割れて二つになる。また併さってひとつになった泰東書道院ができる。その他の展覧会もできた。それまで定期開催の書道展のあったのは、日本美術協会という上野竹の台にあったパノラマの隣りの会館ひとつだったと思ふ。

博物館と勸工場をミックスしたような平屋建ての薄暗い美術協会々館で、みな軸装の書作品が並び、その何分の一かは中国明清あたりの書作品。それに少し日本の古筆や近世名家の軸を加えて、参考品と貼り紙してガラス戸の中に並べてあり、観覧者もひっそりと巡覧している奥の方の大テーブルに中国の毛氈を敷き、当時の老先生方、中堅先生方が列んで、観覧者の囁に応じて、額、軸から色紙短冊扇

面などを揮毫なさる。

会場を一巡した人々は、最後にここに集まって先生方の揮毫を目前に見て、感嘆しついに財布をひもといて、自分もとほしいものをその係に申し入れる。小さい申込書が各先生に配られて順次に書き、書く順に乾かして印を入れ、当日か数日後かに手渡されるのである。

これは大変私ども書生つぼにとつて参考になり、翰墨場の作法から文房具の趣味のようなものまで、布字や執筆法などに伴って学びとることが出た。白足袋に紋服という支度で趣向を凝した筆硯、印などを置いて、黙々と書く先生、呵々談笑の間に書く先生、実に風流なものであったように思う。(つづく)

『筆間雑記』中村素堂隨筆集昭和六十三年刊より転載。

《お詫びと訂正》

前月号『硬質の書』(二)の中で文字が欠落している部分がありましたのでお詫びし訂正致します。下段右から九行目「現代意識」

十一行目「考えてみては」



「不樂復何如」 一昭和48年一